様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年４月１９日現在

機関番号：１５１０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５２０１２３
研究課題名（和文）　ハプスブルク帝国下のチェコにおける宮廷社会と音文化の展開

研究課題名（英文）　The Development of the Czech Court Musical Culture in the Habsburg Monarchy

研究代表者
内藤　久子（NAITO HISAKO）
鳥取大学・地域学部・教授
研究者番号：６０２６３４５６

研究分野：人文学（音楽学）
科研費の分科・細目：芸術学・「芸術学・芸術史・芸術一般」
キーワード：チェコ・バロック音楽、都市プラハ、ルドルフ II 世、宮廷音楽、ハプスブルク家、ボヘミア文化、声楽ポリフォニー、カンツィオナール

１．研究計画の概要

(1) 1526 年以降、約 400 年に及び、ハプスブルク家の属国にあったチェコ諸領邦を舞台に、絶対主義王制時代の 16 世紀末、後期ルネサンスから 17･18 世紀バロック期にかけて展開した宮廷音楽の有り様を、まさに歴史的視座から調査・研究し、とりわけチェコ・ルネサンス音楽およびチェコ・バロック音楽の発展の諸相を、それらを取り巻く宮廷社会や政治との関わりの中で読み解きながら、ハプスブルク家やボヘミア諸領邦の動向、さらには人文主義の開花について深く洞察することを通して、ヨーロッパ文化の地平における中欧チェコの音文化発展の意味を考える。

(2)チェコ史を紐解くならば、まず 14 世紀に栄華を誇ったカレル四世の時代を経て、チェコ・ルネサンスおよびチェコ・バロックの芸術文化が熟成し、豊かな音文化の遺産が創成された。こうしたチェコの伝統的な文化遺産が、やがて 18 世紀後半以降の「民族復興」の基盤を形成したという仮説の下に、後期ルネサンス時代の都市プラハの音楽生活について洞察するとともに、フス派の敗北を招いた「白山の戦い」（1620）後のバロック音楽の特殊性とその多彩な音楽の美質について細かく 4 期に分けて考察する。即ち、初期・中期・後期バロック、さらにバロック末期に至る変遷の過程を亡命音楽家の軌跡も含めて描写し、16~18 世紀の宮廷社会を背景とした、チェコ人による音芸術の世界を都市・社会・政治・文化史の関係から明らかにする。

２．研究の進捗状況

(1)中欧史研究および中欧文化史研究の一環として、これまでヨーロッパ文化史や音楽史文献、特にチェコ音楽史に関する諸資料の入手に努めながら、ボヘミア王国がハプスブルク帝国の一諸領邦となって独立性を失う 1526 年以前とそれ以降の歴史的背景について、それをハプスブルク帝国史との関係性のもとに明らかにし、かつて中世に繁栄を極めたカレル四世の時代から、ヤン・フス及びフス派革命の時代、さらには 17 世紀初頭の「白山の戦い」後の時期から 18 世紀後半の「民族再生」の時代へと移行する、極めて複雑なチェコ史の系譜を纏めるに至った。

(2)上記(1)を通して得た歴史研究の知見をベースにして、16~17 世紀における都市プラハの状況を紐解くとともに、ローマ・カトリック教会という限定された中での「声楽ポリフォニー」を中心とする輝かしいチェコ・ルネサンス音楽の開花や、フス派の賛美歌「カンツィオナール」の美質、加えてカトリック教会音楽家の活躍等について、それぞれ入手した文献や楽譜を通して理解を深めることができたといえる。

(3)16 世紀末~17 世紀初頭に在位した「ルドルフ II 世の統治時代における都市プラハの芸術文化の発展」に注目し、特にR．W．エヴァンズの文献を参照しながら、プラハ宮廷を舞台とした、後期ルネサンス時代にみる中欧文化の諸相を読み解き、宮廷の庇護の下に、チェコ文化もまた、ヨーロッパ文化の地平でその輝かしい繁栄をみるに至った諸史実について、概ね明らかにすることができた。

(4)ハプスブルク帝国下のチェコにおける宮廷の文化史に関する具体的な事例研究として、17 世紀のチェコ諸領の宮廷で展開された宮廷楽士団、即ち「宮廷カペレ」の活動実態について、その詳細を明らかにした。とりわけ盛期バロック文化を成熟段階へと導いたモラヴィア中部の宮廷文化を代表する「オロモウツ・カペレ」の様態について、当時の普遍的なイタリア音楽との比較のもとに、「中心と周縁」といった視座から、ヨーロッパ芸術文化のダイナミズムを含めて考察するに至った。

(5)ボヘミアにおける後期バロック音楽と宮廷社会の有りようについて、18 世紀を代表する英国旅行家チャールズ・バーニーの旅行記から読み取れるプラハの都市生活について新たな知見を得ることができたと考える。

３．現在までの達成度

②概ね順調に進展している。

（理由）概ね 4 年間の研究計画に従って進めており、単年度で纏めることが不可能な内容のものは、継続して文献を入手し、それらを読み解きながら、本研究を進めていることがその主な理由である。特にチェコ・ルネサンスとバロック音楽をめぐる、チェコ諸領邦の音楽生活の実態を、いわば都市との関係から明らかにする点については、主に文献研究を中心に、計画通りに進めているといえる。交付された補助金は、主に文献や音源・楽譜の入手に当てており、一部を除いてそれらの文献や諸資料の入手は順調であるといえる。

４．今後の研究の推進方策

(1) H22 年度に交付を受けた補助金においては、予定していた洋書文献の一部がH22 年度中に入手不可能となった為に、実支出額において直接経費をすべて消化することができなくなり、その分を返金することとなったが、それら入手できなかった文献については、次年度の交付金を通してできるだけ早期に入手できるよう努める。

(2) 本研究が取り扱う内容は、きわめて広範囲にわたっている為、当初、本研究の射程に含めていた「チェコ人亡命音楽家」に関する個別の詳細な記述については、その歴史的過程に言及するのみとし、従って個々の亡命音楽家の動向については、本課題の内容から外して、あくまでチェコ諸領邦内を中心とする音文化の考察に留めることとする。

(3)これまで知見として積み上げてきた「チェコ・バロック音楽の全容」について、政治史・社会史等の視点を含めた立体的な視座から纏めの作業を進め、宮廷社会における「カペレ」の実態とともに、教会音楽をも含めて、最終の纏めに入る。さらにチャールズ・バーニーの旅行記を継続して読み進めながら、ボヘミアの社会史的記述を読み取り、これまでの知見を補足する。

(4)ハプスブルク帝国下のチェコ地域に開花した教会音楽と世俗音楽の動向を、ヨーロッパ文化の普遍性とどのように結びつけるのか、さらに限定された条件下での「チェコ音楽」の発展の様相を、「動態性」や「中心と周縁」といった視座から体系づけていくことを目指しつつ、我が国では殆ど知られざる中欧の音楽文化の歴史的事象を、社会史の側面からも明示していきたいと考える。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①内藤久子、「チェコ音楽－その受難の歴史－」、月刊都響（12 月号）、No.272、48～52、2010 年、査読有.

②内藤久子、「ハプスブルク帝国下のチェコにおける宮廷の文化史－17 世紀バロック期における『宮廷カペレ』の諸相」、地域学論集、第 6 巻第 2 号、179～195、2009 年、査読無.

③内藤久子、「B．スメタナの連作交響詩《わが祖国》の美学－19 世紀ボヘミアにおける「近代芸術」の指標、N響Philharmony、第 81 巻第 2 号、15～30、2009 年、査読有.

④内藤久子、「文化による『チェコ民族再生』－ハプスブルク帝国下のボヘミアにおけるナショナリズムの動向」、地域学論集、第 5 巻第 2 号、157～176 頁、2008 年、査読無.

〔学会発表〕（計１件）

①内藤久子、「チェコ音楽とナショナリズム－民族的闘争の時代－」（招待講演）、大阪大学大学院人間科学研究科グローバルＣＯＥプログラム「コンフリクトの人文学」、2010 年 12 月 3 日、大阪大学.

〔図書〕（計１件）

①内藤久子、音楽之友社、『作曲家◎人と作品シリーズ　ドヴォルジャーク（第 3 版）』（単著）、2010 年、270 頁.